

多摩川の神さまは、近ごろ北国から引っ越してきて興味津々。近所のニンゲンたちが何を考えているのか知りたいと思いました。そこで使いの者をやってちょっとしたイタズラをすることにしました。

「ホイ、心吉、お前に小判をあずけるから、カクカクシカジカしてきなさい」

「ガッテンだよ神さま！」

心吉はいそいそと川岸に出かけて行きました。

上流から優太が歩いてきました。一本橋を渡ろうとしてきたところで、心吉が声をかけました。

「もし、優太。お前に小判を10枚やろう。でもお前がそうしたいというなら、お前が受け取らなかった分は、次に通りかかった者にすることにしよう。お前が譲らなかったら、次の者にはなんにもやらん」

「そんな、神さま。案外ケチですね」

心吉は心外に思いましたが、こういう時にと、神さまから教わった通りに答えました。

「こちらにも色々と事情があつてな」

優太は小判5枚を次の人に譲ることにしました。「だって、お互い様だもんな」。優太は独り言ちました。

「オラもこんな服を来て、こんな風に現れると、神さまに見えるんだな。ウフフ」。心吉は嬉しくなりました。

経太がやってきました。

「もし、経太。お前に小判を10枚やろう。でもお前がそうしたいというなら、お前が受け取らなかった分は、次に通りかかった者にすることにしよう。お前が譲らなかったら、以下同文だ」

「なんで？」と経太は言いました。「なんだって次の人に小判をやる必要があるのさ？ 神さまの言うことはワケガワカラナイヨ」

「こちらにも色々と事情があつてな」  
「まあいいや。オレは10枚もらうよ。ありがとうな」。経太はスタスタ歩いていきました。

経次がやってきました。

「もし、経次。お前に小判を10枚やろう。でもお前がそうしたいというなら、以下同文だ」

「えええ？」経次は考えます。「全部もらうと言ったらどうなるんだろう。なんかあるんじゃないのか。畏か。畏なのか。畏ですか？」

「こちらにも色々と事情があつてな」

心吉はそれしか言えません。

ええい、ままよ！と、経次は小判を9枚、もらうことにしました。

「はて。ニンゲンにも色々いるもんだのう」。多摩川の神さまは楽しくなってきました。それで、三人を呼び出して質問することにしました。もちろん訊くのは心吉の仕事です。「もし、お三方。お前さまたちは、人生に満足しているかね？」

優太は言います。「ぼちぼち、かなあ」

経太は言います。「うん、満足してるよ」

経次は言います。「うーん……」

分散分析してみると三人の差は有意でした。多重比較をすると、経太>優太>経次という差が見られたのでした。「生きるって、ややこしいことだなあ」。心吉は考えこんでしまうのでした。

# 語弊曲解拡大解釈は百も承知です。できれば元の論文を読んでくださいね (Yamagishi et al, 2014)。



## Profile — 平石 界

東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学助手・助教、京都大学助教を経て、2012年4月より現職。博士(学術)。専門は進化心理学。